基本に立ち戻った事故防止の取組み

株式会社ソルコム

1．はじめに

弊社は、平成26年10月までの１年間に競争参加停止処分対象となる設備事故（５件）を発生させ、お客様およびNTT西日本様に大変ご迷惑をお掛けしました。

事故が発生するたびに、どうして事故が起きるのかについて検討・分析すると、“基本動作の徹底”がなされていないことが一番の要因であることにたどりつきます。

しかしながら、基本に立ち戻ってみると、“基本動作の徹底”とはどのような状態なのかを具体的に示したものがなく、漠然とその言葉を繰り返し発しても、現場第一線まで浸透していませんでした。

そこで、自問自答を繰り返す中、

“基本動作”とは、ルール、方法、責任者を明確にすることであり、

“徹底”とは、関係者全員が理解・認識・実行できることであると定義し、基本に立ち戻り、「教育→理解→実行→確認　の安全PDCA確立」の取組みを進めることとしました。

2．PDCAサイクルが回る仕組みの構築

取組みの着眼点としては、安全衛生マネジメントシステムの強化を図り、“改善策のPDCAサイクルが確実に回るシステム”（図１）を構築していくこととし、PlanとDoで終わりがちな風土を見つめ直し、特にCheckの強化を図りました。

以下に、構築した仕組みの中から、いくつか紹介させていただきます。

3．「ソルコム安全の鉄則」の制定

まず、作業者全員が遵守すべきルールについて、ITEA版『安全の鉄則』に収録されていないソルコム独自ルールや点在していたルールを１冊にまとめた『ソルコム安全の鉄則』を制定することとし、「絶対に起こしてはならない事故」を設定（アクセス７項目、ネットワーク７項目、土木５項目）し、作成に着手しました（図２）。

図１　PDCAサイクルが回る仕組み

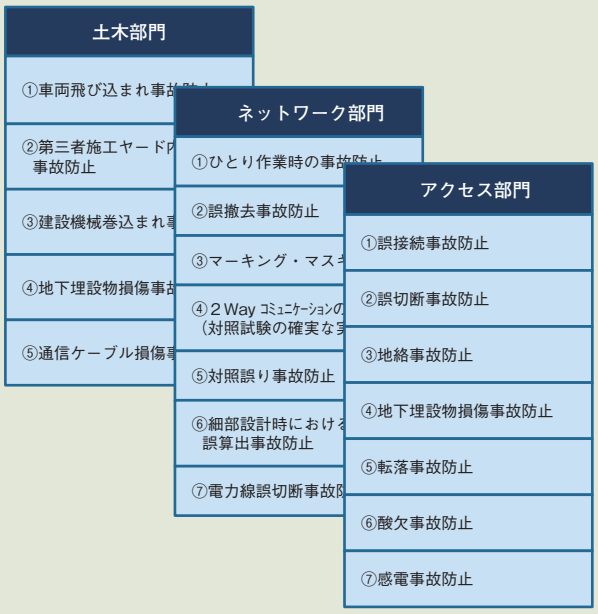
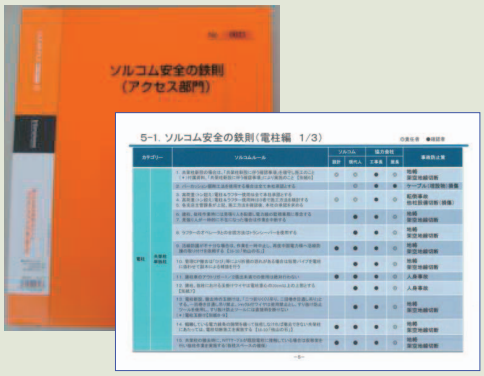


図２　絶対に起こしてはならない事故



ソルコム安全の鉄則（アクセス部門）

同ポケット版

図３　ソルコム安全の鉄則

「ソルコム安全の鉄則」のポイントは、これまでにソルコムで発生した事故から設定した独自のルールと責任を明確にしました。具体的には、

①ソルコムと協力会社が順守すべき共通ルール

②設計者、現場代理人、工事長、班長、各々の責任の明確化

であり、アクセス部門においては、「Ａ４版の詳細版」に加え、「班長・作業者が常に携行して確認ができるポケット版」を作成し、作業者全員に配付しました（図３）。

また、早期に現場への定着を図るために、作成した「ソルコム安全の鉄則」 に関する勉強会を開催、その理解度テストを実施し、満点をとれなかった作業者へは個別指導を行い、作業者全員が満点をとれるまで繰返し、繰返し行いました。

さらに、この「ソルコム安全の鉄則」を協力会社との契約図書の１つとして正式に規程しました。

また、NTT工事部門以外の部門（民需系）についても、「ソルコム安全の鉄則」を制定し、同様な展開を行いました。

４．安全朝礼の一体実施

協力会社の拠点は、中国地方全体に多数点在しており、安全朝礼については、これまで“協力会社任せ”となっていた拠点が多く、ソルコムの責任者が毎日は朝礼に参加できていませんでした（図４）。

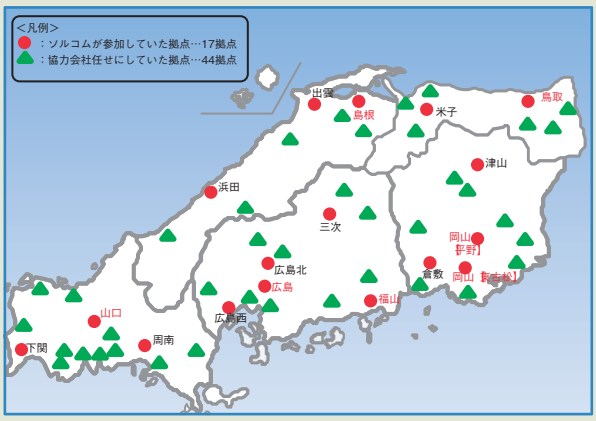


図４　安全朝礼実施拠点

そこで、元請から協力会社への安全指導・情報共有を確実なものにするために、安全朝礼を一体で実施するルールを制定し、協力会社単独拠点（44拠点）の安全朝礼へもソルコムの責任者が毎日参加することとしました。

毎日、安全朝礼にソルコムの責任者が参加するこの取組みは大変ですが、協力会社に「ソルコムが毎日参加すると、邪魔だったり鬱陶しくなどありませんか？」という問いかけに対して、

①「協力会社に目を向けてもらって感謝の一言ですよ」

②「支店長・安全品質管理室長・線路課長・設計課長など、各々の立場の方がスピーチされるので飽きないです」

③「日々の安全装備点検時に、程よい緊張感があってキッチリやるようになりました」

などの回答があり、好評をいただいています。

遠隔地への移動には時間もかかり、けっして容易な取組みではありませんが、今後も継続していくこととしています。

また、安全朝礼の実施方法や内容については、ソルコムとして統一したルールがなく、拠点ごとにまちまちとなっている状況でした。

そこで、安全朝礼の統一化を図るため、「安全朝礼実施要領」を制定するとともに、協力会社へは、「朝礼の進行ポスター」を作成・配付し、安全朝礼の標準化を図りました（図５）。

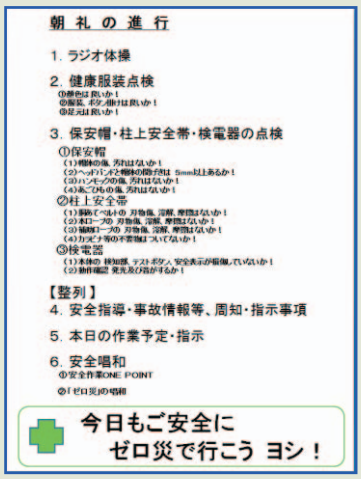


図５　安全朝礼進行ポスター

写真１　事故情報共有化模様

５．確実な事故情報の伝達

自社で発生させた事故に関する速報・再発防止については、真剣に再発防止の取組みを実施してきましたが、他社で発生した事故については感受性が低く、メール一斉配信システムでメールを発信して“完了”、朝礼で口頭で伝えて“完了”、としてしまうことも散見されていました。

そのため、メールや口頭で伝えるだけでは、「作業者の腹に落ちない」、「事故の状況が理解できない」、「作業者の記憶に残らない」などの反省がありました。

そこで、写真や概要図、「ソルコム安全の鉄則」の掲載ページ等の情報も加えたソルコム再発防止策を記載した「事故情報による注意喚起資料」を事故ごとにワンペーパー（図６）で作成し、安全朝礼（写真１）において、作業者全員に対し確実に配付し、そのワンペーパーを基にソルコムから周知･注意喚起することとしました。

図６　事故情報による注意喚起資料

図７　情報伝達記録シート

また、当日の朝礼欠席者に対しても、もれなく確実に伝達するために、「情報伝達記録シート」を作成し、後日周知のあった日に、本人にサインをもらうルールとしました（図７）。

６．忘れてはいけないソルコム事故カレンダー

NTT西日本グループ統一安全スローガン『私たちは過去の事故を教訓に、類似事故を絶対に起こしません』をベースに、ソルコムとして２度と同様な事故を発生させないために、過去においてソルコムが発生させた事故を忘れ去ることのないよう、毎年その日に発生した事故を振り返る「忘れてはいけないソルコム事故カレン

図８　忘れてはいけないソルコム事故カレンダー

ダー」を作成しました（図８）。

このカレンダーには、2007年から2015年の間にソルコムで発生させた人身・設備事故と、他社で発生した人身死亡事故の合計61件を収録しており、作成したカレンダーは、ソルコム各拠点および、各協力会社へ配付し、安全朝礼および安全品質の日等で活用しています。

7．タブレットを活用した遠隔サポート

協力会社とのコミュニケーションツールの導入も進めています。遠隔地の協力会社や、直行直帰の班長にタブレットを貸与し、ソルコム事務所のパソコンとインターネット接続によるTV会議システムを利用し、事故情報のリアルタイム共有、急きょの作業指示等に活用しています（写真２）。

写真２　タブレットを活用した情報共有模様

8．安全監査

これまで、作業現場においては、安全専任者による安全パトロールにより、安全作業が確実に実施されているかの確認は行ってきましたが、設計者や現場代理人が元請として、決められたことを確実にやっているのか、設計から施工まで確実に情報伝達がなされているかを確認する仕組みがありませんでした。

そこで、安全管理部門と主管部門合同での安全監査によるCheckの強化を図り、“元請として安全に関するルールを確実に順守しているか”について、定期的に監査を行い、“安全PDCAが確実に回っているか”の確認を行っています（図９）。

安全監査の結果は、当日現地での講評に留めることなく、全部門・全支店参加（協力会社社長は年２回参加）で毎月開催している“安全マネジメント会議”において報告を行っています。

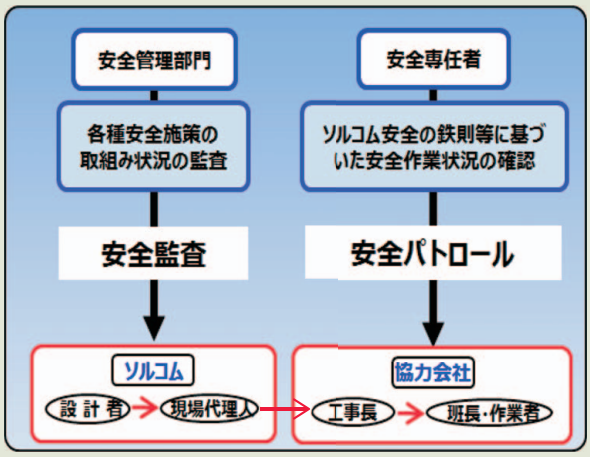


図９　安全審査による元請チェック

9．おわりに

最後に、これらの取組みにより、最近では、事故の多発傾向は収まっている状況であり、今後もさらなる工夫・改善を加えながら、“事故「ゼロ」の実現”に向けて継続して取り組んでまいります。

今回紹介させていただいた弊社の取組みが、ほんの少しでもお役に立てれば幸いです。ご安全に。